

機関番号：13301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20530167

研究課題名（和文） オーストリア第一共和国史とオーストロ・マルクス主義に関する研究

研究課題名（英文） Research of Austro-Marxism in the history of the first Republic In Austria

研究代表者

上條 勇（KAMIJO ISAMU）

金沢大学・経済学経営学系・教授

研究者番号：70113545

研究成果の概要（和文）：

オーストリア第一共和国の歴史で重要な役割を果たしたオットー・バウアーとオーストロ・マルクス主義について、主としてSPÖ リンツ綱領（1926年）と翌年に生じた7月15日事件について詳細に調べ、その研究発表を行った。そして、バウアー達が、マルクス主義の教条主義に捉われてかたくなに妥協を拒んだとか日常的な改良活動を軽視したとかいう影響力のある評価に対して史実にそくして批判をおこなった。

研究成果の概要（英文）：

I researched on Austro-Marxism that accomplished the key role in the history of the first republic in Austria, chiefly about the Linzer Party program(1926) of the Austrian Social Democracy and the Event of 15. July 1927. I criticized the past evaluation concerning it, and announced two results of the research.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経済学、経済学説・経済思想

キーワード：オットー・バウアー、オーストロ・マルクス主義、オーストリア社会民主党、リンツ綱領、7.15事件、オーストリア第一共和国

1. 研究開始当初の背景

第一次大戦を契機にハプスブルク帝国が崩壊し、ポーランド人、チェコ人、スロヴァキア人、マジャール人など他民族が帝国から離脱した後、ドイツ系オーストリア人によって、オーストリア第一共和国が成立した。第一共和国史は、国家としてまだ固まっておらず、また君主主義に憧憬をいだく人々が支配階層に多く見られた。ブルジョア陣営と労働

陣営に政治的に二極分化し、ブルジョア陣営はファシスト団体を支援育成した。両陣営への政治的極端化は、第一共和国の不安定な政治構造をなした。労働陣営をリードしたのがオットー・バウアーを指導者とするオーストリア社会民主党であり、その思想と路線をオーストロ・マルクス主義と呼んだ。我が国においては、第一共和国史におけるバウアーらのオーストロ・マルクス主義に関する研究は驚くほど少なく、また研究文献目録も整理さ

れていない状況であった。海外においても、バウアーらが果たした歴史的な役割については、評価が種々に分かれていた。かつては否定的評価が強かった（N・レーザら）が、近年積極的に評価する動きも見られるにいたっている（D・アルベルスら）。

バウアーとオーストロ・マルクス主義に関してその歴史的評価がまだ定まっているとは言い難い。

2. 研究の目的

研究の目的の第一は、本研究によって我が国においてオットー・バウアーとオーストロ・マルクス主義に関する、とくに若手研究者の関心を高め、これに関する研究を促すことにある。我が国においてはマルクス主義思想史においてレーニンが高く評価される一方で、レーニンが批判の対象とした思想については否定的に評価する傾向があった。今日こうした政治主義的な研究態度は改め、マルクス主義思想史の多様で豊富な内容を客観的に研究する必要がある。

第二に、バウアーとオーストロ・マルクス主義に関する評価が種々に分かれる海外の研究に対して、史実に即した研究を日本から発信し、問題提起を行うことにある。つまり国際的水準での研究をめざす。

第三に、オーストロ・マルクス主義に関する詳細な洋文献目録を作り、今後の我が国における研究に貢献することを意図した。我が国では、現在のところ、オットー・バウアーとオーストロ・マルクス主義に関する若手研究者が育っていない。この点を憂慮して、研究の手引きの作成を意図している。

Web 上にオットー・バウアーとオーストロ・マルクス主義に関するホームページを作成することを目標とした。つまり、研究の一般への発信を目標とした。

3. 研究の方法

本研究では、海外の文献資料調査研究に力を入れた。最初の2年は、ウィーンで労働運動史研究所とAK（ウィーン労働会議所）図書館に通った。また、副次的にアムステルダム社会史国際研究所に通った。労働運動史研究所とアムステルダム社会史研究所にはオットー・バウアー、アルヒーフがあり、ぼう大な資料を保管している。これを有効に利用することが要となった。AK図書館では、オーストリア第一共和国時代の新聞記事を閲覧した。最後の1年は、予算の都合もあり、資料収集の多くの仕事をやり残していたアムステルダム社会史国際研究所一本にしぼって研究を行った。主たる調査方法は、もちろん研究所の端末を使った検索に基づき、第一

次資料をデジタル・カメラに収め、マイクロ・フィルムについてはプリント・アウトし、議事録については一部コピー機械で複写をおこなった。こうして集めた第一次資料を日本国内で整理し、翻訳と抜粋に努めた。もちろん第一次資料の収集とその利用は、研究の基本をなしている。しかし、第二次資料として海外の研究文献を調査収集する仕事も、研究状況を把握する上で重要である。第一次資料の他、オットー・バウアーとオーストロ・マルクス主義に関する海外の研究文献を多数集め、これに基づき、オーストロ・マルクス主義研究の洋文献目録を作成した。

ドイツ人のアドバイスを受けながら、一部バウアーの自筆の手紙について解説を行った。自筆の字の解説は難しく、今後の息の長い作業になるが、その足掛かりを得た。

4. 研究成果

研究発表、論文作成、報告書の作成の3つによる。

まず社会思想史学会の会員が集まった研究会で、毎年3月末に開催されているポスト・マルクス研究会で2008年度と2010年度の2回正式の研究報告を行った。またより狭い仲間の中で、インフォーマルな報告を1回行った（2009年度）。研究会でもマルクス離れが進んでいるが、独自の（異端と言ってもよい）マルクス主義であるオーストロ・マルクス主義に関する研究発表は、大きな関心を集めた。

史実に即した下記の2つの論文（1つは共著の第2章「オットー・バウアーとSPÖリンツ綱領——オーストロ・マルクス主義の再評価に向けて」）を発表した。

研究の最終年度である2010年度には、報告書『オットー・バウアーとオーストロ・マルクス主義——オットー・バウアー小伝と研究文献目録——』（70頁）を小冊子として90部印刷作成し、配布した。これは、我が国初めてバウアーの生涯にわたる思想像を示したものである。全体像を見渡すことができ、非常に参考になったという読後感想が寄せられた。また、バウアーの著書の翻訳文献目録、手紙目録の1部、洋研究文献目録は、今後の研究に寄与するものとして高く評価された。なお、オットー・バウアー小伝を作成することは私の長年の悲願であったが、科研費助成金を得て、研究の要となる部分の論文を書くことができ、ようやく完成をみたのである。今後これに基づき、著書を作成する予定である。なお、バウアー小伝の目次を以下に示しておく。

I 若きバウアー

- (1) 生い立ち
- (2) オーストロ・マルクス主義者へ

- の道
- (3) 『民族問題と社会民主主義』
- (4) 社会民主党帝国議会議員団の書記時代
- II 第一次大戦とバウアー
- (1) 戦争の勃発そして捕虜
- (2) ロシア革命に関する考察
- (3) 左翼民族綱領
- III オーストリア革命
- (1) ハプスブルク帝国の崩壊とドイツ系オーストリア共和国の樹立
- (2) バウアー外交
- (3) ボリシェヴィズムか社会民主主義か
- (4) 社会化とその挫折
- IV リンツ綱領への道
- (1) 連合政権とその崩壊
- (2) 「建設的野党」の路線
- (3) ザイペル政府の登場とジュネーブ再建
- (4) 批判的野党路線と「権力への道」
- (5) 2つの綱領員会の設置
- (6) ウィーン農業綱領
- V バウアーのリンツ綱領報告
- (1) SPÖ リンツ党大会
- (2) 多数者の獲得とプロレタリアートのヘゲモニー
- (3) プロレタリア独裁をめぐる
- (4) 社会主義への過渡的構想
- VI 7. 15 事件とオーストロ・マルクス主義の危機
- (1) SPÖ の選挙勝利と 7.15 事件
- (2) SPÖ 党大会における路線論争
- (3) バウアー報告
- (4) レンナー報告
- (5) 党大会での討論と決定
- VII ファシズムに対する敗北の道
- (1) 小休止 Pause
- (2) 世界恐慌の勃発とファシズムの前進
- (3) 世界恐慌の分析
- (4) ソ連の 5 年計画をめぐる論争
- (5) バウアーのなし崩しの後退
- VIII 敗北、亡命そして死
- (1) 2月蜂起とバウアーの亡命
- (2) オーストリア社会民主主義者外国ビューローの設立
- (3) ウィーン会議と統一社会主義党の結成
- (4) 「統合的社会主義」論
- (5) ナチスによるオーストリアの併合とバウアーの死

研究成果の具体的内容として、オーストリア第一共和国史における政治的な不安定の構造の客観的理解に肉薄できたと考える。バウアーとオーストリア社会民主党 (SPÖ) リンツ綱領の詳細な客観的分析、流血事件とな

り多数の逮捕者を出した不幸な 7. 15 事件とこれをきっかけにした SPÖ の党内論争の分析を通して、バウアーとオーストロ・マルクス主義がマルクス主義の「教条主義」的な立場に立っていたとか、革命の日が来るまで待機主義的な態度を示し、改良闘争を軽視したとかいう歪んだ批判に徹底的に反論できたと思う。オットー・バウアーとオーストロ・マルクス主義は、レーニンらコミニズムに対抗して、プロレタリア独裁 (ソヴェト独裁) 道を否定し、社会主義が自由と民主主義と不可分なものであることを強調し、議会制民主主義的な道を歩んだ。また、労働者の経営参加を基礎づける労使同権的思想 (共同決定権) を追求し、当時のオーストリアにおいてそれを担う経営協議会の設置にいたった。この労使同権的なあり方は、第二次大戦後のオーストリア第二共和国の労使関係の特徴づけており、オーストリア型の福祉国家の要をなしている。オットー・バウアーとオーストロ・マルクス主義はこの意味で今日の西欧社会民主主義の一流源をなしていると言えるであろう。

これまでマルクス主義思想の歴史の科学的な研究は、政治主義的な「正統」「異端」のレッテル貼りとともに歪められてきた。こうした政治主義的歪曲から解放されるならば、そこにまだ豊かで多様な思想的内容を見いだすことができる。本研究はその一端を示すことができたと考える。

なお、「報告書」としての小冊子の作成に時間がとられ、オットー・バウアーとオーストロ・マルクス主義に関する私のホームページは作成できなかった。しかし、多くの写真も含めてその内容となるベースが出来たので、科研費助成期間が過ぎた後も、引き続きホームページの作成に向けて努力していきたい。ホームページを開くのは、今年 (2011 年) の一つの目標にしている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕 (計 1 件)

① 上條勇 「オーストロ・マルクス主義の危機——7. 15 事件と SPÖ の党内論争——」 『松山大学論集』 第 21 巻第 4 号 (2010)、169-193、査読無だが、他大学還暦記念論文集の依頼論文である。

〔学会発表〕 (計 2 件)

① 上條勇 「オットー・バウアーとオーストロ・マルクス主義：オットー・バウアー小伝

と研究文献目録」第 18 回ポスト・マルクス研究会、ゼロセッション、2011 年 3 月 28 日、摂南大学寝屋川キャンパス 1 号館（大阪府）
②上條勇「オーストロ・マルクス主義の危機」第 16 回ポスト・マルクス研究会、第 4 セッション、2009 年 3 月 28 日、岡山大学津島キャンパス（岡山県）

なお、ポスト・マルクス研究会は年々会員数の増大を見せている全国的研究会で、学会に準ずる組織であると考えている。通常年 1 回の定期的研究会が開催されている。昨今の学会が若手の登竜門的性格を帯び、若手の報告が多いのに対して、ポスト・マルクス研究会は真に専門的な研究会である。

〔図書〕（計 1 件）

黒滝正昭、上條勇、相田慎一、太田仁樹、ばる出版、『ポスト・マルクス研究——多様な対案の探究——』2009 年、第 2 章、31 頁～87 頁（第 2 章のタイトル「オットー・バウアーと SPÖ リンツ綱領——オーストロ・マルクス主義の再評価に向けて」）である。

〔その他〕

ホームページ等

社団法人北海道雇用経済研究機構の機関紙『HEERO』とそのホームページ掲載に向けて原稿依頼があり、「ルドルフ・ヒルファディングとオットー・バウアー——異端のマルクス主義と西欧社会民主主義の源流——」（400 字詰め原稿用紙 10 枚）を作成した。今年（2011 年）の夏ごろに掲載される予定である。これは今回の研究成果の一端であり、また研究意義を一般に発信する機会をなしていると考えている。ちなみにヒルファディングとはバウアーの友人で、オーストロ・マルクス主義者のひとりである。このような機会があれば、引き続き、オットー・バウアーとオーストロ・マルクス主義に関する一般への発信に向けて努力していきたい。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

上條 勇（KAMIJO ISAMU）

金沢大学・経済学経営学系・教授

研究者番号：70113545